

---

# **本業：学生、副業：勇者と魔王やつります（前、俺のジョブは勇者と魔王）**

ポチ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本業：学生、副業：勇者と魔王やつとります（前、俺のジョブ  
は勇者と魔王）

### 【Zコード】

Z5305Z

### 【作者名】

ポチ

### 【あらすじ】

とある世界のとある領土。そこは魔族と人間達が互いを認め合はず殺しあっていた。そんな世界とは関係ないはずだったのにあの日全てが狂った。

タイトルが変わってる?『氣にするな!

## 第1話 召喚の準備

「くそ！ 魔族どもめ……」

狭い部屋の中で男は声を荒らげて叫んだ

「王様……やはり我々が魔族を滅ぼすことは不可能では？」

一人の老人が呟くように言った

「……だが今更後にはひけん。それに今回は連合国家の獣人族にエルフまでいるのだ。しかも獣人族の中でも名高いウォルド・グラウに、魔法使いの中でもトップを争うほどのエルフ、エル・ベレン、さらにはこの私剣士としては超有名なラッシュ・ソルドまでいるのですぞ！」

自信満々に言う男

「……ですがラッシュ、あなたは一つ忘れております。……エル殿にウォル

ド殿は先程の戦いで重傷を負い戦場にはでれません。」

これを言つたのは服装的に看護師的存在の女だつた暫く長い沈黙が続いた。そこへ

「お父様……勇者を、勇者を召喚しましょう。」

国の第2王女ネル・ゲヴィッターヴォルケは言つ

「ネルよ、勇者を召喚すると必ず「ことがビリゅウ」とか分かつていつているのだな？」

勇者を呼ぶには魔方陣が必要。善の言葉で綴られた魔方陣に大量の魔力、そして勇者に必要な力を得るための犠牲……勇者を召喚する者の命……

「私は国で唯一勇者を召喚する力をもつ者です。魔族との戦争が始まった時から覚悟は決めておりました。」

彼女の目は覚悟を決めていた

「ならばさつせと召喚せよ。」

実の娘が國、いや父のために自分の命を犠牲にして勇者を召喚すると言つてい  
るのだ。その娘に対し王は冷たく言い放つた。  
少しは自分のことを見つのが悲しい、などの言葉を発してくれるのかと期待して  
いたネルの目には傷ついた様子が現れていた。

(せつせと召喚しろ……か、やはり私は父にとってただの道具、戦  
争に勝つた

めの勇者を召喚できる以外には必要とされない『道具』だったのですね……

でも姉さまや妹達、国民のためにも私は勇者を召喚する……)

彼女の決意は硬かつた、たとえ父に道具と思われていると分かつても

【SIDE魔族】

「なんとゆうことだ……」

同胞 魔族の大量の死体を見て彼 デヴォルム・デモニックは言つた

「隊長！ 人間達が勇者を召喚しようとしているとのことで…」「

魔族の兵士がデヴォルムに告げる

「勇者が……人間どもはそこまでして我ら魔族を滅ぼしたいか。……皆に伝え

よ、勇者召喚に対抗し、我らは『魔王』を召喚する！」

魔王の召喚も勇者召喚と大して条件は変わらない。変わるのは魔法陣に使う文字

字が「善」から「悪」に変わることと、高い魔力がいる。さらに勇者と違い命でわなく魔力を奪い取るため体、書く器官、細胞などのいろんなことを具現化するためには一人の命では足りない、足りたとしたら魔王など必要ないだろう

「生贊は？」

そう問い合わせる兵士に

「敵対していた魔神達を捉えたはずだ。奴らを生贊に捧げれば十分足りる。

足りんようなら私の娘でも生贊に捧げろ」

さすがは魔族の全軍を指揮する隊長。彼には生贊を、娘を惜しむ気持ちがなかった。

ネルの父もそうだったが……

## 第1話 召喚の準備（後書き）

エルフや獣人は魔族じゃないのか？とゆづりで補足しようと  
ます^ ^

エルフや獣人など『善』の感情をもつたものは魔族ではなく『ハー  
フ』 人間と魔族の混合、に分類されています

仮にエルフが『悪』の感情を持ち大きくなるとエルフからダークエ  
ルフとかわり魔族に分類されるようになります。

要は善か悪かとゆづりでですね

## 第2話 召喚された青年

夜、人間と魔族は召喚の準備を始めた。

勇者には善、魔王には悪。  
そして魔方陣が作られた。

「聖なる力よ闇を払い」

「闇の力よ聖を犯し」

「正義の力で我らを守れ」

「破壊の力で全てを壊せ」

「もしも我らが悪に犯されたなら」「もしもわれらが聖に浄化されたなら」

「汝の力で葬りされ」

二つの種族の言葉が重なった

次の瞬間、一筋の光が魔方陣からでて生贊、召喚士はきえた。ここまでは普通

どうりだった。いや二つの詠唱が重なってしまった時からすでに普通ではなかつたが。

それぞれの魔方陣から発していた光が徐々に近づき合いつつに戦場の真ん中に動いていく。当然今まで勇者や魔王が召喚されることは稀だったためそれが普通だと思っていた。そして……二つの光が重なり広がり魔方陣を書いてゆく

片面には『悪』 Chaos (混沌) B?ser (悪)

Hass (憎悪) ……

片面には『聖』 Frieden (平和) Lichtenrefl  
exion (光) Wunsch (希望) ……

おかしかつた。あきらかに……

そして光が消えながら一人の青年があらわれた。

「魔王様！」 「勇者様！」

声が重なる。魔族と人間はそれぞれのお互いに見つめ合ひ。じいじで勇者が魔王、どっちが召喚されたのかで勝利はきまる。

「絶対勇者様にきまつていー！ そいで『それこましょー？ 勇者様』

「ふつ馬鹿な…… 我らが魔王様に決まつておるわ！」

互いに言い合ひ。まだだれもおかしいとは思つていなかつた。生贊が起き上がるまで……

「あ、あれ？ 私は勇者様を召喚すると死んだはず。」

ネルだつた。生贊となつたはずの彼女はなぜか動けた。意識もあつた。

周りを見るとみんなが啞然として私をみている。

「な、なん、で？」

同じように魔王召喚で生贊となつた者たちも生き返つていた。ここにきて初めてみんながおもつた

(おかしい！)

そしていそいで魔方陣から出てきた青年を見る。

そこには黒髪、黒目、右手に善の魔方陣、左手に悪の魔方陣をもつ青年がいた

「お、お前は一体なんなんだ？ま、魔王か？それとも勇者か？」

## 第2話 召喚された青年（後書き）

誤字、脱字とう感想があつたら報告くださいまし^\_^

### 第3話 よびだされた青年

#### 【SHIDE謎の青年】

「おーい！ 勇也。」

向こうから俺を呼ぶ声がある。

俺の名前は魔籠勇也まのとりゆうや中学三年一五歳……とだれに血口紹介してんだ？

「勇也！ むしすんなよ～」

向こうから拗ねた表情で走ってくる男。

「ああ、わいこ。ちよつと考え方してた」

俺がそつまつとい、まあいにげどこの感じの表情でみてきた。

「それよつ勇也、こいつのか？」「なんど」で道草食つて？

「?.今日なんかあつたつけ？」

俺の問いに男　語はありえない！　と言いたげな感じで見てきた。

「お、おお……今日は裕也の幼馴染かつ彼女の彩香の誕生日だろー。？」

「や、やばー……わ、わす

「忘れてた、とか言わないよね？」

なんだよー。その俺を攻めるよつな田ーや、やめてくれー

「ま、まさか～ 忘れるわけねーじゃんか。あは、アハハハ

嘘だね、つと語で言わわれたのは氣のせいだろひ。

「おひや~~~~~い！ ！」

彩香に怒鳴られる

「ま・さ・か忘れてたんじゃないわよね？」

「う、うめんなさい。忘れておひました。  
なんでもするからその笑顔でおれを殺そひすのせあへべださ  
い……

「わ、わるかつたつて！」

「あー やつぱ忘れてたんじゃん！」

俺の言葉を聞いて話が追い打ちをかける  
ちなみにこのあと「」馳走にあいつくまでに彩香に冷たい視線で見ら  
れてた気が  
するのは氣づいてない」とこじておいた。

「まつたく…… 幼馴染の誕生日忘れるとかサイテーだよー。」

完全に拗ねた彩香。その姿はとてもかわいらしく後ろから襲いかか

……「ふん」

「こや、本当に悪かったって。」

「じつと、と睨んでる彩香。

「あーせりー、せりーフレゼントやるから、なー。」

と、もので釣つてゐる」と云う。

「……プレゼント用意するのはフシーだよね?」

おつとバレたか……

「じゃあこりない?」

少し、いじめてみるか……

「こぬー。」

即答だつた。

「でもなー、彩香こつまでもすねてるしなー」

チラッと彩香をみると焦つてすねてないアピール。本当にかわいい。

「え? ? ? な、なんの?とかなー」

笑顔で顔してくる。……が、かわいそつだしさ!」まだかな

「わかったよ。まじ」

と言つてペンドントを渡した

「い、これってたしか去年欲しいなって言つてた……覚えてくれたの？」

彼女の問いに笑顔で返す  
……まさとか思つなよ？

そして楽しいパーティーもおわった。夜も老けたから解散とゆつこ  
とで

そしてある出来事が起つた

家の鍵を開けてなかに入る。親も夜遅いからもつ寝ているのだろう  
風呂にははつて寝よつーとおもつて服を脱ぎ風呂場に行き湯船に漫  
かつた  
そして気がついたら

鎧をきた兵士や何かのコスチュームなんかしつぽや耳が生えた人た  
ちに囲まれていた

「お、お前は一体なんなんだ？ま、魔王か？それとも勇者か？」

鎧をきた兵士や何かのコスチュームなんかしつぽや耳が生えた人た  
ちに囲まれていた  
もちろん全裸の状態で

(は？魔王？勇者？なにいつてんだ？)

「答えるー。貴様は勇者なのか？それとも……魔王なのか？」

……いや答えるも何も俺は世間一般の中学生ですぜ？」「んなゲームに熱中した覚えはないはずだけど？ああー夢か……夢なら全裸見られたって屁でもないーほつぺたつねつてちつちと起きるかもぎゅ

……あれ？力が弱かつたのかな？目が覚めないな……えい！  
ギュー———

……よしー。そりかひとつわかった……

「これは夢じやねええええええ！」

第4話 勇者？魔王？（前書き）

更新

## 第4話 勇者？魔王？

お、オワタ……全裸で何叫んでんですかって目で見られてる気がする。

女の方もいらっしゃる！ああ、俺はここで変態ボケかスナスピとして語り継がれてゆくのかとか変なこと考えていると

「な、なんだ!? 今あいつ何か叫んでなかつたか?」

ん？俺は夢じゃねーと言つてただけですか？

いやいや……俺は、ね？ そんなこといつてないから

やはり魔王様なのですね！

■ ■ ■ ■ ■

いや魔王も何も俺……ただの中学の子

「ま、魔王だああああああー。あ、あいつは俺たちを殺す歡喜の雄叫びを

上げていたんだああああ！

「くそおお！ ネル……この！ バカ娘があああああ！」

！ あいつ女に剣向けてやがる！

「くわが……」

いまのあいつらの話から分かることがある。

一つ、俺の言葉はあいつらは雄叫びに聞こえている。

二つ、俺にはあいつらの言葉は理解することはできるが話せない三つ、そしてあのクソ野郎は話的に自分の娘を切ろうとしてる……

「これに負けたのはお前のせいだ！ 死ねえええ！」

王が剣を振りおろした。そして一つの首が飛んだ。

「くそ野郎が……」

王の振り下ろした剣はネルには届かず勇也の手で止められていた、いや正確

には勇也の魔力が強すぎ体が強すぎ剣を跳ね返していった。そして首に剣があたってしまい王が自滅してしまった。

「お、王様！」

周りがざわつく。

「やはり魔王様だった！ さあ魔王様、やつらを皆殺しの

「勘違いしてんじゃねえよ……」

デボルムが言い終わらる前に勇也は言っていた。

俺は一人殺してしまった。たとえそいつが自分の娘を殺そうとした

やつでも

人には変わりない。だが、魔王にもなる氣はないし変な戦争に巻き込まれんなら

勇者にもなりたくねえ。

「俺はお前らどっちの味方にも付く気はないー。俺は……中立だ！」

」

唸るよつい言ひ。いや實際にはあこづらになつてゐるよにしか聞こえんだが……

戦場が一瞬で静まり返つた。その沈黙を破つたのは「ヴォルムだつた。

「？なにを言つておられるのかは分かりませんが、あなたはたつた今人を殺し悪に染まつた！」

召喚の契約に従い我らの駒とな　」

彼が言えたのはそこまでだつた。なぜかつて、生贊にされていた魔王達が自由になつていることをわすれスキだらけだつたから。生贊にした娘に心臓を貫かれたから。

「ゴフッ……そんな言葉がにあつたわ。

「な、なにを、する？ふら……む」

フランとは多分娘の名前。

「なにをですつて？みてわかりません、お父様」

彼女の目は冷たく父を見据えていた。

いや、うん自分の娘生贊にするつて……ほんとひでえな。その残虐さは人間のやつもかわんねーか……

「さよなら」

彼女は言つた。そして剣を抜き取り一刀両断……さすがにこのあとどうなつたかは見る勇気がでなかつた

「さて……魔王様……いえ勇者様かしら?」

そういうやまだ名前行つてなかつたんだつけ……あ、言つても無駄なのか。

「……」

「ああ! そりいえばあなたは言葉がはなせないのでしたね……

『全てを理解し、全てを悟れ!』 [翻訳]

フランムがなにかを唱える。

「? なにをしたんだ?」

「あなたの言葉をこいつでもわかるよ! こじたのよ

え? て」とはやつと話が通じるのか!

「あ、そうか……最初に言つておくが俺は勇者でも魔王でもない!」

「

「いいえ、あなたは勇者、そして魔王の召喚儀式で同時に呼び出された。

あなたは勇者と魔王その両方の力をもつて召喚されたのです。あなたが

魔王、勇者どちらになるかはあなたの心しだい。悪にそまればいつの日か

魔王に善にそまれば勇者に」

と、言つたのはフランではなくネルだった。

「一つ聞いてもいいか?」「は……どうだ?俺の家はどうにある?」

「……あなたの知つている世界はここではありません。故にあなたの家は

別の世界にあります。あなたは魔族と人間の戦いの兵器、道具としてここに召喚されたのです。」

少しためらしながらもネルは言った

「……は? じゃあ何か? お前らのくだらん理由の戦争の『道具』にされるために

俺は家族や友人……恋人達とあえないってか?」

ふざけんな……俺は道具じゃねー。

感情が高ぶっていた。だからそのときは気づけなかった。自分が召喚され

手に入れた力が暴走してしまつて居ること。

ふざけんな、ふざけんな、ふざけんな！

道具にするために俺から大切な人たちから引き離したのかよ？  
んでなんだ？召喚されたと同時に奴らを殺せ？私たちを守れ？  
知るか……

「うわああああああああああああああああああああ！」

『悪』と『善』の魔力が体中がでる。

そして、そこにあつた全てのものを吸収していた……

## 第4話 勇者？魔王？（後書き）

なにげに唐突過ぎちゃつてますが感想あつたらくださーへへへ

## 第5話 魔王に近づけちゃった（前書き）

誤字脱字等ありましたら報告ください

## 第5話 魔王に近づこうやつた

気がついたら周りには何もなくただ黒い地面みたいなものが続いていた。

そして体の異変に気がついた。

善と悪の両方を吸収して彼の体は人と魔族が合体した感じだ

髪は黒そして頭には一本の角、片方は折れている。

顔には右目の中下に赤い線が入つており、ぱつと見すこく怖い。

体は胸の部分に召喚されたとき半分で別れていた魔方陣が悪、善交

互で鳩の

上あたりにある。

手はそれぞれの手の甲に右は善、左は悪の文字で綴られた魔方陣がある。

足はとくに変化はみあたらない。

かわりにケツからしつぽが生えていた……

あれだ……勇者と魔王で言われたけどこれじゃ魔王じゃね？

人間の部分多いけどさ……ぱつと見普通の魔族よりこえーじやん！

善に染まれば勇者って言つてたし、人間になれるか？

だけど俺はあの馬鹿王ひとりじゃなく、まわりにいた奴ら全員消してしまった。

多分あいつらだけでも4、5万はいたんじゃないか？そいつら全員消してしまった。

だから魔王に近づいてしまったのか？「うーむ……

「ま、そのうちわかるか……とりあえず今は地球に帰る方法を見つけなきやな……」

最悪なことに、最も口喧嘩した奴らも全員消してしまった。『』がどこかに

ひとこなのかすり

まともに分からぬ上、地球に帰る方法があるのかすらわからない。

「はあ～惱んで仕方ないしどつか町でもさがすか……」

わて～とつあえずじづけつから動いつか  
体は浮いてるんだしこんなまま飛べないもんかな～

背中からぐんに羽をイメージしてみた。すると……  
メキツバキ！ ミシミシ～  
と音を立てて羽が出てきた。

……予想外、でした。『』、今度から氣を付けて実験していこ  
とりあえず羽は出せたんだし町でもさがすか。

「よつと」

羽を使い移動してみる。

うん、なかなか速いし、快適だな～  
こんなままで暮らしてもOKだ

バン！

……あ、あぶな！

銃弾が頬をかすめた。

なにこれ？ から来たのは間違えないけど……この間にか地上の  
あるところまで  
出てたのか。やつぱしさやいね

ドン！

心臓を打たれた……  
そして落ちた。

だが

「いつてえええええ！」

打たれた跡は跡形もなくふさがっていた。

「な！ 馬鹿な……確実に心臓を売ったはずだぞ！」

ビーヴヤーリアの男があれを撃つたみたいだな

「おこてめえ……じこゆつもつだ？ いきなりつ

バンバンバン！

三連射。ちなみに全部心臓を打ち抜いてた。魔族の弱点なのかな？

「だ・か・ら……じこゆつもつだああ！ ！」

すくなくとも恨みを勝つた覚えはないはず！ 消した奴らを除いて

「ー？ またふさがつている……」

無視かよ……

おこてめえ！ 僕の質問にこた「だまつてくれ！ ……え、ろ

よ?」

な、なんで俺が怒られた?

「いやいやまでまでそこの君、ボーグ、きみだよその男の子だよ。ヘイ! なんでいきなり打たれた俺じゃなくて君が怒るんだい?」

ちょいとバカみたいにきいてみた。

「……どいつているんだ?あの銃弾にはハーフ、魔族とわざ一撃で殺せるように魔法を付けていたんだが……」

「聞いちゃいねーよ」のクソガキが! しかもサラッときけんな」といつてるよね?

そんな人にむけちゃダメってなんと言つたらわかるの?.

「ん?ああすまなかつたな気にするな! どいつせ死んでないし、死んだとしても痛みはなかつたから! ……きっと

おい……死ななかつたからといって、ふざけんなよ? しかも痛みはないのあとにぼそつと多分ていつてなかつた? ねえ?

「君にいくつか質問がある。君はハーフか? 魔族か?」

そんな質問より俺の心の中の質問に答えて欲しい今日この1日! 使い方間違つてるのはあれだ!

スルーだ

「ハーフ？なんだそれ？俺は人間だ！　訳あってこんな姿になっち  
まつてんだよ！」

訳は話さない方がいいだろう

「ハーフをしらんのか？珍しいな……それ以前に人間とゆうこと  
信じられんが？」

さすがに人間でゆうのはむりがあつたか

「あー、あれだ！ほら～その～、えーっと……！　呪いだよー！」

咄嗟に出てきた言い訳その一　のろい！

「……嘘はよくないぞ？そんな呪いは聞いたことがないからね」

バレた！でもここで引き下がつたら嘘と完全にバレちゃう……

「世の中広いんだぜ？　ま、お前のよつなチビガキじやわからんない  
ことだつてあるさー！」

し�ょげんな！と精一杯励ます。

「チビ……ガキ？……」

なんだらうづく、周りの温度が急に下がったような

「Eis (氷)　regnen (降る)

?よく聞き取れなか

「！？！」

チビガキが何かを呟いた瞬間ちびガキの手に魔方陣が浮かんできた。

「【アイスランチャー】」

今度は聞き取れた。そして危険が察知できた。  
いそいでさっきまでいた場所からどく。そしてそれが正しかったことが分かった。

チビガキの魔方陣からちらりらりが無数に飛び出していた。

いくら体の傷か治つても痛いもんは痛い！

「なにすんだ！」

「うぬさいなあ……僕のことをチビガキ扱いした報いですよ？」

この攻撃が終わつたのはチビガキの魔力が切れたときだつた。

「たく……ちびのくせ魔力多いんだな」

「何か言いましたか？」

「おつと危ない。

「なんでもねーよ

「そうですか、でわざつかの馬鹿のせいで遅くなりましたが自己紹介でも……」

遅そくなつたのはお前のせいだぞ？

「僕は アイシクル・フルトニー、雪エルフです。」

雪エルフ？てゆうかエルフ？

「なんだ？エルフって？」

俺が質問すると呆れたように見られた。

「ハーフを知らない時点で馬鹿とは思つていませんでしたがここまでとは……」

やれやれ、と仕草をする。  
いつとくけど俺はまだ来て一日も経つてないんだからな？それで魔  
力とか使えるだけすごいことじやない？

「エルフは魔法に優れた種族です。雪エルフとゆうのは普通のエル  
フと違ひ氷系の魔法が

得意なんです。」

へーと思つてゐる俺。  
ん！ いいこと考えた！

「なあ！ 僕に魔法の使い方教えてくれ！」

正しい使い方知らないとまた暴走か、あの痛さを味わうことになり  
そうだからね……

「その前に名前と種族を教えてください。……不審者、いや変質者を村に入れるわけには生きませんから」

不審者は分かるけどなんで変質者なんだ？……ん？

……そつか、そうだよね、俺……服着てなかつた、テへ  
いまわら隠しても遅いか……

「あ、ああ、俺の名前は魔籠勇也、種族は前に言つたとびうり人間だ！」

「だから嘘はダメですって！ 呪いと言つていましたがそんな呪いはありません！」

「だーかーらー！ 世の中広いの！ 知らない呪いの一つや二つ絶対あるつて！」

「いーえ！ ありません。なんなら僕が解呪してあげてもいいですよー？ 僕は呪いは全て解くことができるんですからねー！」

「でもお前が知らない呪いなら解けないだろー！」

「解けなくてものるいかどうかたしかめるだけでもいいんですよー！」

「そ、そのでがあつたかつてやべつっこー！」

ジトーと見てくる。

「ほーら、やっぱり嘘だ。匕つやら見た田と違つて脳はちつちやこ

ようですね

うん、こいつむかつくは。

「で？ 魔法教えてくれんのか？」

話をそらす。

「あなたがなんの種族か教えてくれたらね」

くそ……そういうや念じたら羽出せたんだからこの角とかしつぼしま  
えるか？

いや、やっぱりやめておひつ……なんかまた痛そうな気がするし。  
考えろ！ 角があつて羽もあり、なおかつしつぽがあるかつちよい  
い種族！

うん！ やっぱりあれしかないね！

「やっぱり隠すのは無理か……俺は……竜人族だ！」

……あれ？ なにもいつてこない。まさか竜人族なんていないのかな？

「な、りゅ、竜人、族？ あの200年前に滅びた？」

なんだ竜人滅びてたのか！ だがいけるぞ！ これは

「ああ……俺が竜人族とバレたら研究材料とかにされそうだしな。  
この目立つ角と尻尾も

できれば隠したいんだがその……何分長い間氷結されてて魔力  
の使い方がよくわからなくなつて」

言い訳その一 氷結されました！

「い、いえ！ はい喜んで教えいたします！」

態度が滅茶苦茶変わったな。

「あとできればなにか着るものが欲しいんだがさすがに素っ裸で移動するわけにはいかない。

「あ、はい、少々お待ちください！」

そうゆうひとタイミングは一瞬できえ一瞬で服をもって現れた。

「つかー！ いまのまつ？」

「こまのはテレポートですか？」

ヤベー、そんあのまであったのか。いや普通かな？

「ん、ああー！ テレポートか。で？ 服は何かあったか？」

話を変えておつか。

「はい。お気に召すかわかりませんが……」

渡されたのは黒い服。全身真っ黒だ。

「ああ、サンキューな」

そういうて服を受け取り着た。

アイシクルの話ではここから村まではあまり離れていないこと。

「ああ、そいえば勇也様は竜人とばれたくないのですよね？」

様づけ……

「ああ」

「なら村に入る前に擬人化しておいたほうがいいですよ？」

ぎ、擬人化？なんだそりや……人に化けるのはわかる。やり方が分  
からん

でもさすがにこれは重要なことだしわからんいつていつたら怪しま  
れるだろーなー  
しかたない……

角と尻尾を消し人間に近づくようなイメージをした。

ゴリゴリゴリ！

まるでげんこつをグリグリ手加減ナシドゴコロにされたみたいだつ  
た。

「うわあ……魔力の込めすぎですよ。しまつときに魔力を使いすぎで  
体に負担が掛かってますよ？」

はは、ととりあえず笑つて「まかす。

「あ、ここです。」

アイシクルが立ち止まつた。

そして俺は止まって前をみた。

目の前には氷の山があつた

「……これのどじが村？」

「？僕たち雪エルフは氷に慣れるため氷を素足であるいたりしないといけないんですよ？勇也様はご存知ないのですか？」

え？そ、そなのが。痛そ。

そう思つて靴のまま村に入つとしたら

「だ、ダメですよ！この村の捷で素足以外で村に入つたものはそれが旅人だろうと神聖な場所を怪我したとみなされ凍られたあと

碎かれちゃうんです！」

……なにそれ？巻き込まないで欲しいな

## 第6話 錦糸川ゆめつづり（前書き）

なんかタイトルと中身違う気が……  
ま、スルーで（え

## 第6話 騎士と魔女

「な、なあ、裸足で氷の上を歩いていたくないのか？」

「どうとかして裸足で歩くことを回避しなくては…」

「そんなわけないですよ。僕たち雪エルフは寒さに強いのでこれまで

なんともないですよ。」

「な、なんともない？魔王と勇者の力を持つ俺でさえ裸足でこんなとこ歩けば

確實に痛くてたまらんし一步あるくたんびにその寒さを味わわなきやいけないのに…。（傷は直る）

「それに勇也様は竜人族なんですから足は竜の鱗で寒さを感じてもそこまで

無いでしょうし、鱗は傷一つ付きもしないでしょ」

な、に？ヤバイぞ……竜といや鱗もあるんだつた……！（ドン）痛がつたり、

傷が付いたりしたら怪しまれちまう。どうすれば…

！（ここは魔法の世界なんだしバリアぐら）あるはず…それを足に付ければ！

「な、なあバリアの張り方教えてくれないか？もし竜人とバレて捕まりそうになつたり

攻撃受けたりした時のためにも…」

本日も絶好調のいいわけ！

「バリア……ですか。バリアも基本中のはずなのですが。……まあ一応

教えときますね。たぶんそんなことはないでしょ」が……。バリアの張り方は、魔力を丸くして自分を覆いたいならそんなふうにイメージして固める。平べつたくしたいなら平べつたくイメージするだけです」

「へー、案外簡単だな。こりや炎とかをイメージして魔力を固めたら炎になつたりして……ないか。アイシクルも呪文？みたいの唱えてたし

とりあえず足を覆うよう魔力をイメージ。そしておそるおそる足を氷の上においてみた。

「おお！ 痛くない！」

成功。温度も冷えたりもせずちょっといい感じ。

「あたりまえですよ。竜人なんですから」

俺は人間だけどな……

「さ、こんなとこでもちくわくわくにはやく師匠のところにきましょう」

師匠？」いつが教えてくれるんじゃないのか？

「こりゃバレないよつに気をつけなきゃな。

「ああ、頼む。」

こいつの師匠の家に着くのにはかれこれ1時間かかった。  
なんでこんなにかかったのかは、……『想像に任せよう  
決してたまたま通りかかった女湯を覗こうとしていたわけではない  
からな？

絶対してないからな？俺は覗くなんて卑怯な真似はしない！

俺はただ女湯に侵入した、じゃない！したりするわけないじゃない  
か

「……勇也様ここです。」

アイシクルの目線が冷たいのは氣のせいだろう

「そ、そうか」

なにはともあれバレなきやいいけど……

ガラガラッ

アイシクルが戸を開ける。するとまず目にいたのは……

18禁のビデオ、18禁の漫画、何に使ったのかわからんが大量の  
丸められた  
ティッシュ。

「……ここにまともな人がいるのかい？」

不安になつた。

だって、ね？ いくらなんでもこれはないっしょ。

こり、師匠つていつたらさもつと、ね？ 悪い感じのとか、へうへらしてんのに

めっちゃ強いとか、そんな感じじやん？

なのに……見事に期待をやぶりやがつたよ？ 変態クソスケベナスビとして

語られてゆくのはこいつに決定！ やつたね俺より上が！

「師匠ー、この方が魔法の使い方を教えてくれとのことです」

いろんなこと思つてたら話が進んでた。

「んあ？ おお！ アイシクル！ 久しいな～。」

ぱつと見だけでも感じ取れる。こいつやっぱ変態オヤジだ！ と。

「で？ そいつは誰だ？」

「はい。この方はりゅ……」

止まつた。竜人族といいそうになつたのを止めたみたいだ

「この方はあの魔族でもハーフでも一撃の魔装銃『サタン・スレイヤー』

を心臓に4発うつたのですが死なかつた人です！」

さ、サタンスレーヤー……サタンて魔王てとつていいよね？ 魔王破壊の銃！ ？……俺が勇者の力もなかつたら死んでたよね？ やっぱりこいつ危険だ……

「なに！あの銃でうつて死なんかつたのか…………」

ドスツ！

心臓を躊躇いなくひとつに。

いつ！  
たああああああああ！

もう一回行つておひうか？傷は治るし、死はない。でもね、痛さはそのまま。

「おお！ 本当に死なん！」

このちの痛さは無視して感動してゐるし。師弟そろつて非常識な

「死になつとんのだか……」この魔剣『サタン・ソード』でも死なんじせ

サタンソードって今度は魔王の剣かい？勇者だけだったらしんでた  
な……

にし疑問……なんでそんな危ないもの持ってるの?て

疑問を口にしおうとしたときやつてくれました。

や  
い  
け  
な  
い。

# 生き地獄！

んで一氣絶  
…

## 第6話 師匠に会おう（後書き）

なんか短いけどまたしてもテスト。  
しゃべりこな感じになります。

## 第7話 番外(?) アイシクル編(前書き)

今日はちょっとしたおふざけ番外?みたいなのです

昨日12月19日さりげなくタイトルかえています

## 第7話 番外(?) アイシクル編

### 【SHIDEアイシクル】

今日はいい天気だ。

こんな日は外で通りかかった人を狩る……名付けて「運が悪かつたねーさよなら」をして時間でも潰しますか。

なにか恐ろしことを考えているのは雪エルフ、アイシクル・フルトニー

年齢17歳にして身長120cmのドチビ「殺すよ?」。……ちなみに彼は魔法科学者の博士号を取るほど頭がいい。彼曰く僕に解けない呪いはない!と語っていることから

わかるかもしれないが彼は解呪がだいの得意。

そんなことはさて置き、これは年齢の割にはちつちつ、「うるさいけど?」奇妙な考「奇妙じゃない!」……えをもつ

奇妙な「物語じやないからね?」……

説明(?)に出てきているアイシクルの言葉はス「スルーしちゃだめだよ? 読者のみんな」ルーして……

うるさいやつめ!これじゃはなし가すすまんじやないか!  
魔術師(嘘)のポチの恐ろしさ見せてくれる!

だまれ!直訳しよう!この綴りはだ「だまれでしょ?」

僕の作品が反乱起こしたよ~グス「キモイよ?」……ん

もうこいや僕泣こちやう。

・

1時間後

はい！司会かわりまして解呪得意のアイシクルです！  
すいませんさつきまで司会していた馬鹿（重要）がなかなかマイ  
クから手

を離さないのでつい時間が……

わっさのどにぞの馬鹿（これ重要2回目）が申しておりましたこ  
とはお忘れください。

それでは僕視点の新鮮かつ僕の考えをお楽しみください！

「さて、せっかくのいい天気なんだしどうかに実験体はあるいてな  
いかない。」

フンフンと鼻歌をうたいながら歩く僕。  
まわりの女の子が可愛い僕をチラチラ見ている。照れるな～（＝  
（＝）

うん？ほかのお話と違つて顔文字やらがある？

馬鹿（重要3回目）と僕は違つておしゃれ屋さんだかね

「んー、にしてもなかなか実験体があるひでないな～」

色々なことを考えながら周りを見渡す。

仕方ないし日を改めようか……ん？

上方からバツサバツサと音が聞こえてくるではありますか！

「うふ、うふふふふふふ。」

おつといけないつい実験体をみつけて喜んでしまった。  
あいつは空を飛んでるみたいだし早く撃たなきや。

そう思つて急いで手にもつた魔装銃「サタン・スレーヤー」を構える

僕は魔術だけではなく射撃も腕がいいんです！  
狙いを定めて……

バン！

おー！心臓に見事あたりましたね。

あ、おちてき、た

「な！ 馬鹿な…… 確実に心臓を売つたはずだぞ！」

確実に仕留めたはずなのに実験体は痛い！とわめいでいる。

もう一度撃ちますか。

「おこてめえ…… どじゅうつもりだ？ いきなり」

バンバンバン！

? こまなにか喋りかけてきたよつな？ まあ僕が気にする」とでもない  
さてやはりこれに耐えられるものはいな

「だ・か・ら…… どじゅうつもりだああ！ ！」

訂正、いましたね……

「…………どうなつているんだ？あの銃弾にはハーフ、魔族とわす一撃で殺せるように

魔法を付けていたんだが……」

「フム、謎ですね……

なにか相手がわめいていますが適当に流しておきましよう大人の対応ってやつで

「 チビガキじや 」

チビガキ？……ほかの部分はよく聞こえませんでしたが（聞いてないのまちがい）

「チビ……ガキ……」

よし、殺しますか（無理すん（せつしきからいぢれ）ですよ？低脳め）

準備完了。つるさご声も黙らせましたし

「 E·i·s （氷） r e a g e n c e （降る） 」

「【アイスランチャード】」

魔法で殺す！

それあーみんな華麗でカッコ良くなおかつ可愛こ私の活躍はまだまだ  
つづ「本編を進めたいのでこのあとは後回し」

……あ・の・やうなまかなかなかなか！

おこしこじるを奪い取る！

作者の力、甘く見てもらつては困りますよ？アイシクルちゃん

## 第7話 番外(?) アイシクル編(後書き)

さあさあアイシクルの言いたいことがこのお話で分かればあなたはすばらしい！

でも無理だろ？……

はい、実はアイシクルは勇也のことを竜人ではないと疑つております。

理由は、魔術最強、武術最強の竜人なのにバリアの張り方すらしない。

このことから彼はジミーに勇也を疑つてたり……

まあ気がむいたら口づるせいドチビやろ「だれがドチビだつて？」

(。。。一一一) ピ、ピッサリってでてきた？

「出番取りやがつて――――――！」

さあああああああああああああ

## 第8話 元魔王（前書き）

なんか最近やけに眠たい……  
授業中なんてきがついたら授業が終わってたり……

# 第8話 元魔王

「ん……んあ！」

ガバッと起き上がる俺。  
ドスつと突き刺さる剣。  
ドサッと倒れる俺。

かれこれ一時間はこんなことがつづいている。  
さつき起きたが起き上がれば確実に刺される。  
念のため行つとこうか？俺は傷が治つても痛さは味わわなきやいけ  
ないのさ

こんなこと続いたら精神的に確実におかしくなるは……

チラッと薄めで周りを覗いてみた。

ひんひんひんひんひん

あのやろー！ 人を散々突き殺し（？）やがつて鼻歌かよ！

ちつ

「うわあ、なかなかつぶせられないやつだなー！」

ドスつ！

なにこいつ？普通寝てる奴をさしだへるか！？

「ふざけるー？心外な！ わしは眞面目な主を！」  
「お前が走るの

そー？」

せめて突き殺そつとしてることを否定して……  
ああ、地球にいたときはもっと楽だったのに……

「お前ら歸弟本当常識はずれだな……」

なんてゆうと、

「常識はずれ？初対面の人の家で挨拶なしに寝る方が非常識だわい」

やれやれ、とじぐさであらわす変態。

寝るつて……だれの、せいと？

「ふん……話はだいたいアイシクルからきいた。わしに魔法を教えてほしんじやろ？」

「ああ、そうだ。でもその前に」

「その前に質問していいか？気になつて仕方ねえ」

俺の問いに

「まあおおかた予想はつくがな……」

だろうね。むしろ聞かれない方が奇跡だ。

「じゃあ聞かせてもらりうが、なんでただの変態が魔王の剣、魔王で  
すら殺せる  
銃なんぞもつてんだ?」

これだけが俺の唯一気になる質問。もしかしたら……俺の助けにな  
ってくれるかもしれない。

「……簡単じゃ、わしは元魔王、そして元勇者はわしの……娘。ア  
イシクルの母じゃ。」

……勇者が魔王の娘……

「魔王の娘が勇者にされたのか?」

「ふつまあな。わしは昔人間に嫁を殺された。それも事故ではなく  
わざと、  
だ、あいつらは笑いおつた。そして気がついたら奴らを……殺し  
ていた  
そして感情的になつて魔力が暴走し、きがついたら魔王になつて  
おつた。」

……やっぱり魔王は腐った人間共がみずから生み出したのにもかか  
わらず  
その罪をみとめもせんと勇者を召喚し魔王を徹底的に悪者扱いして  
殺させる。  
しかもこの変態の場合嫁をこうした人間側に付いてしまつた娘が相  
手だ……  
娘さんもたぶんしらんかったんだろうな、

「そつか……お前もいろいろあつたんだな変態……」

涙田になつて同情する。

「やめんかい！ 同情されたくて話したんぢゃないわ！」  
明日

「庭にでてこい！ わしが根情たきなおしたるわ！」

根情叩き直される覚えはないが変態、いや元魔王は  
そういふとなぜか走るようにでていつた……  
と、みせかけ心臓めがけて突進されたのはいい思い出。

## 第8話 元魔王（後書き）

誤字脱字ありましたら報告ください。^-^

すいません

この文もPSPで書いてたり・・・。  
p.cが壊れたためしばらく更新できません。ほんとごめんなさい。

以下文字数稼ぎ

第九話 たーだーこまー特訓中 サーザベヒコトモーダイ……(前編)

ながりく更新してませんでしたが、じたぶんぶつかつですー。

## 第9話　たーだーいまー特訓中　はーやくとこでチョータイ……

あれから約一週間はたつていた。

変態もとい元魔王に魔法の使い方をならつていた。

そもそも俺は魔王と勇者と言うゲームで『ララズボス（マジック）』と勇者（最終的に魔王よりシエー）

の力をもつていて。いわゆるチート？みたいなものと考えて欲しい。

んで、魔王の力で聖属性いがいの魔法は全部使えるは、勇者の力があるから

最終的に全部使えるわっしゃつ……

だが、さすがにこの変態が元魔王でも信用できるとはかぎらない。

魔王だしね。

だから属性を一つとゆうことにしている。

最初、変態が俺の属性を調べるといつていた。

やり方は、魔法により作られた属性紙というものがありそれに魔力をこめるだけ。

ちなみにこの田までにあるて「ど魔力コントロール」の実験をしていたため

わかつたことがある。魔力に炎をイメージすると属性は炎にかわる。結構前に考えていたことは一応間違いではなかつたってことだ。だが炎を

つくるにはやっぱり呪文みたいのがいるみたい……

ちなみにこの時流した魔力は地の魔力と炎の魔力。

変態曰く属性を複数持つ人は少ないみたい。（隠して正解だつた。）

またその複数の属性は対に位置する属性はもてないらしい。（最初

にしそうだった

最初は変態（元魔王）が剣術を俺に叩き込もうとしたが俺には剣の才能がないことに気がついたらしく、いまは格闘術をおしえてもらっている。

もちろんただの格闘術じゃない。左右の拳に炎と地の魔力を宿させてそれで

攻撃する。俺には上級魔法はもちろん中級魔法でぎりぎりのため魔法を宿らせた

魔闘術をメインで修業中。ようするに魔法の才能すらなかつたってことや……

「火よ！ 全てを燃やす業火となれ！」

そう言つと、右手から魔方陣がでて炎をつくりだした。そして拳を前につきだす。

「【フライインパクト】」

拳の炎が前にビーム上に発射された。

「まだまだじゃな……。

凍える寒さより生まれし冷氣よ。全てを凍らせよ！ 【冷凍撃】」

変態の手から冷氣の塊がでてきた。そして俺の炎のビームを凍らせた

「詠唱破棄はどうやらマスターしたようじゃな。じゃがまだ魔力の込めすぎじゃ！

魔力を減らして魔法の質を良くせい。あんな魔力をこめた魔法を

もし吸収魔法を

もつ相手にとられたらそんじゃ！魔力ばかりのスッカラカンの魔法じゃよお前んは

詠唱破棄 アイシクルがとなえていた綴り（スペル）のこと。  
俺や変態がとなえている言靈とちがい魔法を構成するのに時間がかかる。

「魔力の込めすぎ……なら次は魔力を少なめ、属性を多めに震える大地よ。全てを揺すれ！ 【アースショック】」

こんどは左手に魔方陣が出てきた。

そして地面を叩きつける。

すると地震がおきた。そして地面から土の刺が変態めがけて迫つてゆく

「まつ……地震をおこし足の自由を奪いながら刺で突き殺す魔法か。じやが……

凍える吹雪よ。大地を止めろ！ 【スノーレイン】」

雪の雨。聞こえはいいが言靈どなり全でが凍る吹雪だ。  
もちろん俺の魔法ごと凍らされた。俺も一緒に……

「じゃ、わしは女湯見てくるからちよこっと待つとれよ。」

うおー！

ふざけんな糞変態ヤローがああああ！

俺も連れていきやがれえええええ！

俺の心の声もむなしく変態は一人女湯に向かつていった……

「ただいま」

なんで上機嫌なんだよ？変態があ

「わひと……修行のつづきで」

変態が言ひ終わる前にひとつ声で遮られた。

「フラスさ――――ん！」

大声で叫びながら慌ただしくドアをあける男。ちなみにフランツてのはこの変態の名前だらう。

「む。ビウした？ 村人Aよ」

え？ 村人Aで……せめて名前でよんだげて変態……ほら村人Aも悲しんでるじゃん

「…………あいつらがまたむらにきました…………」

どこか悲しそうな村人A

「なに！？ またこりもせざ來たのか……よしー、勇士よ、柴原k  
マットれ2時間以内には帰つてこれるかもしれん。」

え！？ せめてといてつて……よ……  
いきやがつた……

## 第9話 たーだーいまー特訓中 はーやべとこトモーダイ……（後書き）

もうすぐ期待（？）のバトルシーンに突入  
ちなみにチート過ぎるんはつまんないからチートの力をそのうちと  
るつもり……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5305z/>

本業：学生、副業：勇者と魔王やつります（前、俺のジョブは勇者と魔王

2011年12月27日19時47分発行